

日本語教師が教えるリプロダクティブ・ヘルス/ライツ

－留学生のための性教育教材開発中間報告－

Reproductive Health and Rights Education for International Students in Japan: Interim
Report on the Teaching Material Development

高向有理（西日本短期大学） 鹿毛理恵（沖縄国際大学） 田中雅子（上智大学）

Yuri Takamuku (Nishi-Nippon Junior College) Rie Kage (Okinawa International University)

Masako Tanaka (Sophia University)

キーワード：留学生、セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ、妊娠、避妊、中絶

1. はじめに

日本学生支援機構によると、2022年5月1日現在の留学生総数は231,146人で、うち日本語学校の留学生数は51,679人と22%を占める。日本語学校の留学生が日本で予期せぬ妊娠をした場合、誰にも相談できず休みがちになって除籍になったり、出産のために留学を中断して帰国せざるを得なくなったりすることがある（田中、2020）。日本で出産する場合でも、妊婦検診をせずに分娩に臨もうとする飛び込み出産や、相談先がわからずひとりで産もうとする孤立出産につながる恐れがある。留学生が妊娠によって窮地に追い込まれてしまうのは、「妊娠したら退学して帰国」といった警告を受けている場合もあるが、多くは正確な情報にアクセスできていないためと考えられる。避妊・中絶に関して日本で利用できる選択肢が出身国と異なることが多いため、慣れ親しんだ避妊法を使わずに妊娠してしまったという人もいる（田中、2022）。また、違法と知らずに日本で未承認の薬をインターネットで購入して自己服薬してしまうというリスクもある。出産・育児の際に利用できる各種保険と休業補償の条件を知らなかったためにキャリアを中断してしまうこともある。そのようなリスクを回避し、健康で安全な生活を送るために、筆者らは留学生にとって必要な情報を提供する性教育教材を制作している。日本語教師は、留学生が来日後最初に出会う日本人であり、生活や人間関係の相談も受けやすい立場にある。来日後できるだけ早い時期に、必要な情報と健康を守る権利について学べるよう、初級日本語の語彙・文法・表現に合わせた教材や授業案を検討している。

2. 先行研究

日本における留学生の妊娠に関する研究では、妊娠による在留資格の取消事例がある一方、出産後に学習継続ができた好事例もあり、そのためには学校内の相談体制、学則による保護の重要性が述べられている（田中、2020）。留学生の性知識に関する研究では、中国人女性留学生のリプロダクティブ・ヘルスに関する知識と行動についての調査から、留学早期に言語・文化に配慮した支援の必要性が指摘されている（斉藤ほか、2018）。また、技能実習生や留学生の出身国の一つであるインドネシアの若者の性教育について、性をタブー視する文化ゆえに未婚者が避妊具にアクセスしづらい点が述べられている（二重作、2021）。来日する若者が出身国でも十分な知識を得ていないことが推察されることから、留学生にとって必要な情報と行動を習得するための教材開発が急がれる。

3. 教材の概要と制作の経過

科研費研究「移住女性とSDGs」プロジェクトが2020年6月から2021年9月にかけて実施したアジア5か国出身者に対するオンライン調査によると、回答した留学生は男性85人、女性126

人で、来日後に性教育を受けていないと答えたのは男性59人、女性77人である。留学生のうち、日本のSRHSに関する情報の正誤問題の全問正解者は男性23人、女性50人であり、性に関する知識は不十分であることがわかった。本教材開発は同プロジェクト主催の「移民女性の妊娠・出産 留学生・技能実習生らの受け入れ担当者のためのオンラインセミナー」の参加者らの提案から始まった。教材は、「若者の健康と幸福、尊厳を実現し、尊重された社会的・性的関係を育て、(中略)かれらの権利の保護を理解し確かなものにする」との実現を目指すユネスコの包括的セクシュアリティ教育(Comprehensive Sexuality Education: CSE)をベースとしている。教材の目的は、日本語学校・専門学校・大学等で学ぶ外国人留学生に、日本での妊娠・出産時に活用できる制度と、避妊や中絶の方法について適切な情報を提供することである。留学生が問題について話し合い考えることによって、リスクを回避し、心身ともに健康で安全な生活を送るスキルと態度を身につけることを目指す。教材原案は、研究協力者である助産師・看護師の資格を持つ日本語教師とともに作成した。福岡市内の短期大学の2学科に在籍する留学生に模擬授業を行い、授業前後にアンケートを実施した。授業前には、計42人のうち23人(女性31人のうち16人、男性10人のうち7人、その他の性1人のうち0人)が性教育を受けたことがないと答えた。授業後に得た学生たちのフィードバックなどから修正すべき点を確認した。その後、医療知識がない日本語教師でも扱える範囲を検討した。教材は、4つのパートで構成されている。①妊娠したらどうしますか?事例1:留学生の妊娠(妊娠検査・病院での受診、学校への報告と在留資格)、②妊娠したくないとき 事例2:予期せぬ妊娠(日本の避妊法、中絶のルール、パートナーとの話し合い)、③子どもを産んで育てるとき 事例3:日本での出産(分娩までの準備と出産前後に利用できる制度)、④困ったときの相談窓口と各国語啓発動画などの情報。避妊、中絶、出産の3つの事例をもとに話し合うことで、内容の理解を目指す。妊娠は女性だけの問題ではないことが理解されるよう、男性を主人公にしたケースも準備した。「あなたの友だちが困っていたらどうしますか」と問いかけることで、相談される側として知っておくべき適切な情報や相談窓口があることを理解してもらう。

4. 結論

授業前のアンケートから、留学生の性に関する知識は十分ではないことがわかった。授業中は、学生から在学中に妊娠した場合の休学や在留資格についての質問があった。基本的な性知識に加えて留学生にとって必要な情報を教材に入れたい。前述の支援者セミナー参加者との意見交換から、性教育に関心を持つ留学生教育関係者が少なくないことがわかった。来日後の早い時期に日本語教師や留学生担当の教職員が性教育に関する授業を行えば、予定外の妊娠を防ぎ、日本での就学を修了できる。また、移民の当事者団体や国際交流協会などが来日間もない人にオリエンテーションを行う際に本教材を使用すれば、留学生だけでなく、多くの外国籍住民にも必要な情報を伝えることが期待できる。

参考文献

- 斉藤早苗・カルデナス暁東・辻本裕子・黒田裕子・町浦美智子・末原紀美代 2018「中国人女性留学生のリプロダクティブヘルスに関する知識と行動」『梅花女子大学看護保健学部紀要』8:11-20
- 田中雅子 2020「移民女性のセクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツの実現に向けた課題ー日本で暮らす留学生と技能実習生の妊娠に関する一考察ー」『国際ジェンダー学会誌』18:64-85
- 田中雅子 2022「日本における移民女性の予定外の妊娠と避妊や中絶サービスへのアクセスーアジア5ヵ国出身者に対するオンライン調査からー」『国際ジェンダー学会誌』20:83-102
- 二重作和代 2021「若者の「性」をめぐるーインドネシアにおけるフィールド調査からー」『アジア・アフリカ地域研究』20(2):292-296
- ユネスコ 2021『改訂版国際セクシュアリティ教育ガイダンス 科学的根拠に基づいたアプローチ』明石書店